

「風姿花傳」(2/3)



世阿弥 著
野上豊一郎・西尾 実 校訂

世阿弥(1363?~1443?)
[世阿弥 - Wikipedia](#)

岩波文庫 33-001-1
ワイド版岩波文庫31
岩波書店 1991年6月第1刷発行
2009年8月14版発行

目次	凡例 (序)
	第一 年来稽古條々(ねんらいけいこじょうじょう)
	第二 物学條々(ものまねじょうじょう)
	第三 問答條々(もんどうじょうじょう)
	第四 神儀云(しんぎうん)
	第五 奥儀讚歎云(おうぎさんたんうん)
	第六 花修云(かしょううん)
	第七 別紙口伝(べっしくでん)
	校訂者の言葉

問答條々

問二。能に、序破急(じよはきゆう)をば何と定むべきや。

答。これ、やすき定めなり。一切の事(じ)に序破急あれば、申樂(さるがく)もこれ同じ。

能の風情を以(も)て定むべし。まづ、脇の申樂には、いかにも本説正しき事の、しとやかなるが、さのみに細かになく、音曲・はたらきもおほかたの風体にて、するすると、安くすべし。第一、祝言なるべし。いかによき脇の申樂なりとも、祝言欠けてはかなふべからず。たとひ能は少し次なりとも、祝言ならば苦しかるまじ。これ、序なるがゆゑなり。二番・三番になりては、得たる風体のよき能をすべし。ことさら、挙句急なれば、揉(も)み寄せて、手数(てかず)を入れてすべし。また、後日(ごにち)の脇の申樂には、昨日(きのふ)の脇に変はれる風体をすべし。泣き申樂をば、後日などの中ほどに、よき時分を考へてすべし。

Q&Aについて:現代語訳

質問二。能で序破急というのはどんなことなのか。

回答二。これは分かりやすいことだ。すべての物事には序破急があるように、能においても同じである。能の場合には情緒がなければならない。まず、公演にあたって最初の演目には、物語が祝い事にふさわしくものとし、緩やかに始めることだ。伴奏となる音楽も物語の雰囲気に合わせて、静かに始めることだ。というのも、能の公演は祝い事であるから、その雰囲気を出すことが必要である。たとえ、能の演技が完全でなくても、祝い事としての雰囲気があればいい。これが序として、公演の始まりに大切なことだ。演目が二番目、三番目へと進むにつれて、役者の得意な演目をしたらいい。演目が進むにあわせて、演じ方の動きに機敏さをだし、盛り上げに繊細さを出すことだ。二日目の公演の中盤には涙をさそうような演目・物語を入れることも考えておかなければならない。

問答條々

問三。申樂の勝負の立会の手立てはいかに。

答三。これ肝要なり。先づ、能数を持ちて、敵人(てきじん)の能に変わりたる風體(ふうたい)を、違えてすべし。序に云ふ「歌道を少し嗜(たしな)め」とは、これなり。この藝能の、作者別なれば、いかなる上手も心のままならず。自作なれば、詞(ことば)・振舞、案の中なり。されば、能をせんほどの者の、和才あらば、申樂を作らん事、やすかるべし。これ、この道の命なり。されば、いかなる上手も、能を持たざらん為手(仕手)は、一騎当千の兵(つわもの)なりとも、軍陣にて兵具(ひやうぐ)の無からん、これおなじ。されば、手柄のせいれい、立合に見ゆべし。敵方の色めきたる能をすれば、閑(しづか)に、模様替わりて、詰所(つめどころ)のある能をすべし。かやうに、敵人の申樂に変えてすれば、いかに敵方の申樂よけれども、さのみには負くる事なし。もし、能よく出で来れば、勝つ事は治定(ぢじょう)あるべし。しかれば、申樂の当座においても、能に上・中・下の差別あるべし。本説正しく、珍しいきが、幽玄にて、面白き所あらんを、よく能とは申すべし。よき能をよくしたらんが、しかも出で来たらんを第一とすべし。能はそれほどになけれども、本説のままに、咎(とが)もなく、よくしたらんが、出で来たらんを第二とすべし。能はえせ能なれども、本説のわろき所を、なかなか便りにして、骨を折りてよくしたるを、第三とすべし。

Q&Aについて:現代語訳

質問三。能の演技で競争者と競うためにどんなことをすればいいのか。

回答三。これは大事なことだ。まづ、自分が演じることのできる演目を多く持つこと。

競争相手とは演技のスタイルに特徴を出さなければならない。最初に言われていることは「歌唱力をつけろ」という事だ。演じる演目の作者が自分自身とは別人なので、どんな上手な役者でも作者の意図は完全に理解することはできない。原作が自分自身であればセリフも動作も自分の頭の中にある。和歌を読み、能を演じようとする者なら、能の物語を創作することも難しいことではない。創作することがこの道で生き残るのに必須である。どんなに優秀な役者でも自作の演目を持っていなければ、誰にも負けない演技力が有っても、戦場で武器を持たないのと同じだ。能の競演の勝敗は演技を見れば明らかだ。競演相手が派手な動き、振る舞いを見せれば、当方は静かな演技で会場の雰囲気を変え、見ごたえのあるように演じよ。そのように競争相手の演目に対抗すれば、どんなに相手が優秀に演技をしても、決して負けることはない。さらに、当方の演技が素晴らしければ勝つに決まっている。だから、能の競演には上・中・下の差がでてくるものと考えなければならない。能の物語の原作が優れていて、新鮮な感覚で、幻想的で、面白いことが優れた能というものだ。そのように出来た能が一番である。演技がそれほどなくても原作に忠実で、欠点がなければ二番である。能の演技はいい加減だけど、原作の欠点を補い、工夫をしているのは三番である。

問答條々

問四。これに大きなる不審あり。はや功入りたる為手(して)の、しかも名人なるに、ただ今の若き為手の、立合(たちあひ)に勝つ事あり。これ、不審なり。

答四。これこそ、先に申しつる三十以前の時分の花なれ。古き為手ははや花失せて古様なる時分に、めづらしき花にて勝つ事あり。真実の目利きは見分くべし。さあならば、目利き・目利かずの、批判の勝負になるべきか。さりながら、やうあり。五十以来まで**花**の失せざらんほどの為手には、いかなる**若き花なりとも**、勝つ事はあるまじ。ただこれ、よきほどの上手の、**花**の失せたるゆゑに、負くる事あり。いかなる名木(めいぼく)なりとも、**花**の咲かぬ時の木をや見ん。犬桜(いぬざくら)の一重(ひとへ)なりとも、**初花**(はつはな)の色々と咲けるをや見ん。かやうの譬(たと)へを思ふ時は、一旦(いったん)の**花なりとも**、立合に勝つは理(ことわり)なり。されば、肝要(かんやう)、この道はただ**花**が**能**の命なるを、**花**の**失**するをも知らず、もとの名望ばかりを頼まん事、古き為手の、返すがへす誤りなり。物数をば似せたりとも、**花**の**ある**やうを知らざらんは、**花**咲かぬ時の草木を集めて見んがごとし。万木千草において、**花**の色もみなみな異なれども、面白しと見る心は、**同じ花**なり。物数は少なくとも、一方の**花**を取り極めたらん為手は、

一体の名望は久しかるべし。されば、主(ぬし)の心には随分**花あり**と思へども、人の目に見ゆるる公案なからんは、田舎(でんじや)の**花**、藪梅(やぶうめ)などの、いたづらに咲き匂はんがごとし。

また、同じ上手なりとも、その内にて重々あるべし。たとひ随分極めたる上手・名人なりとも、この**花の公案**なからん為手は、上手にては通るとも、**花**は後まではあるまじきなり。公案を極めたらん上手は、たとへ能は下がるとも、**花は残るべし。花だに残らば**、面白きところは一期(いちご)あるべし。されば、**まことの花**の残りたる為手には、いかなる若き為手なりとも、勝つ事はあるまじきなり。

Q&A:現代語訳

質問四。その答えに疑問があります。既に名優と認められた役者にまだ新人である役者が勝つことがあります。これはどうしたことでしょうか。

回答四。これこそが先に話した30歳前の**若さの持つ花・魅力**というものだ。年配の役者の**花・魅力がなくなり**、演技が古臭くなり、若い役者の新しさの魅力に負けたのだ。

本当にの演技力を見抜く人なら、そのことを見抜いている。それは見る人にとっての眼力の勝負でもある。相手の役者が50歳になってもまだ**花・魅力**を失っていないければ、若さだけがとりえの役者は勝つことはできない。まさに、どれほど名優といわれても**花・魅力**を失えば負ける。どんなに名木といわれている桜でも**花**が咲いていないようなものだ。たとえ、ありふれた一重の桜でも咲きだせばそれはそれで十分に見る価値はある。この桜のたとえは、たとえ一時の**花・魅力**といっても、勝負の世界では必勝の理由となる。だとしたら、大切なことは能の世界では**花・魅力**が生命であることを知ること、自分の**花・魅力**がなくなっているのに気付かずに、昔の名声はまだあると考えるのは大変な間違いであると知ること。どんなに数多くの役柄をこなせても、そこに**花・魅力**がなければ、**花**が咲く草であるのに、**花**のまだ咲いていない草を集めて見ているようなものだ。いろいろな草木に咲く**花**はそれぞれ千差万別で個性があることを知り、そのこと楽しみ、めでる気持ちは能の世界の**花**を見る目、気持ちと同じである。演じる演目や役柄が少なくても、一つの演目、一つの役柄の中に**花・魅力**があればその役者の評判、名声は一生ものである。

しかし、自分には**花・魅力**があると思っけても、他人にそれを認めてもらえなかつたら、そんな**花**は田んぼのや藪に咲く雑草の**花**みたいなもので、誰も見てくれないし、めでもしない。

また、名人といわれていても、自分の手の内にさまざまな演技のバリエーションを持っていなければならない。たとえ、自分自身の演技が完成したと思っけている名人でも、**花・魅力**について創意工夫がなければ、名人として世間で通るとしても、いつまでもその**花・魅力**は持ち続けられない。創意工夫を続っけている名人は、たとえ演技力が落ちてても、**花・魅力**は持ち続ける。役者として**花・魅力**があれば一生演じられる。だから、本当の**花・魅力**を持つっける役者はどんな若い役者にも負けることはない。

問答條々

問五。能に得手得手(えてえて)とて、ことの外に劣りたる為手(して)も、一向き上手に勝りたる所あり。これを上手のせぬは、かなはぬやらん。とまた、すまじき事にてせぬやらん。

答五。一切の事(じ)に、得手得手とて、生得、得たる所あるものなり。位(くらゐ)は勝りたれども、これはかなはぬ事あり。さりながら、これもただ、よきほどの上手の事にての料簡(れうけん)なり。まことに能と工夫との極まりたらん上手は、などかいづれの向きをもせざらん。されば、能と工夫とを極めたる為手、万人が中にも一人もなきゆゑなり。なきとは、工夫はなくて、慢心あるゆゑなり。

そもそも、上手にも悪き所あり、下手にも良き所必ずあるものなり。これを見る人もなし。主(ぬし)も知らず。上手は、名を頼み、達者に隠されて、悪き所を知らず。下手は、もとより工夫なければ、悪き所をも知らねば良き所のたまたまあるをもわきまへず、

されば、上手も下手も、たがひに人に尋ぬべし。さりながら、能と工夫とを極めたらんは、これを知るべし。

いかなるをかしき為手なりとも、良き所ありと見ば、上手もこれを学ぶべし。これ、第一の手立なり。もし、よき所を見たりとも、我より下手をば似すまじきと思ふ情識(じやうしき)あらば、その心に緊縛(けばく)せられて、我が悪き所をも、いかさま知るまじきなり。これすなはち、極めぬ心なるべし。また、下手も、上手の悪き所もし見れば、「上手だにも悪き所あり。いはんや**初心の我**なれば、さこそ悪き所多かるらめ」と思ひて、これを恐れて、人にも尋ね、工夫をいたさば、いよいよ稽古になりて、能は早く上がるべし。もし、さはなくて、「我はあれ体(てい)に悪き所ををばすまじきものを」と慢心あらば、我が良き所をも、真実知らぬ為手なるべし。良き所を知らねば、悪き所をも良しと思ふなり。さるほどに、年は行けども、能は上がらぬなり。これすなはち、下手の心なり。かやうに我が身を知る、されば、上手にだにも、上慢あらば能は下がるべし。いはんやかなはぬ上慢をや。よくよく**公案**して思へ。「上手は下手の手本、下手は上手の手本なり」と工夫すべし。下手の良き所を取りて、上手の物数(ものかず)に入る事、無上至極の理(ことわり)なり。人の悪き所を見るだにも、我が手本なり。いはんや良き所をや。「稽古は強かれ、情識はなかれ」とは、これなるべし。

Q&A:現代語訳

質問五。能の世界では演技のうまさ話題になるが、意外なことに演技が下手な役者でも、時には演技のうまい役者に勝つことがある。演技のうまい役者にそのようなことがあってもいいのか、あってはならぬことではないか。

回答五。どこの世界にもうまいといっても、生まれ持った者もいる。演技のランクではうまいとされても、生まれ持った演技能力には勝てない。しかし、これは思っているほどの名人ではないということだ。本当に演技について**創意工夫**を重ねた名人なら相手がどんな役者にも互角に演じるものだ。だけど、そのように演技に**創意工夫**をやりつくした役者は万人に一人もない。なぜなら、たいいていの役者は工夫もせず演技ができるとうぬぼれているからだ。そもそも、うまい人にも欠点はある、下手な人にも長所はあるものだ。そのようなことがあるという見識をもった人もない。また、本人自身も気付いていない。演技がうまいと言われる人はその評判に隠されて自分自身の欠点に気付かない。また下手な人は自分自身の欠点に気付いていないので、自分自身の長所にも気付かない。うまい人も下手な人も互いに批評し合わさねばならない。能の演技に**創意工夫**をしようとするならこのことを知っておかねばならない。どんなに変な役者であっても長所があれば、演技が上手な人もそれを学ぶべきだ。これが技術を高める一番の方法だ。他人の長所を見つけても、自分よりも下手な人から学ぶことはないと考えたら、その考えに束縛されて自分自身の欠点を知ろうとはしない。このような考え方では向上できない。また、演技が下手であっても、演技の上手な人の中に欠点を見つけたなら、「上手だと言われている人でも欠点があるのだから、まして**そのことを気付いた修行中の自分**にはもっと欠点があるだろう。」と考えて、人に教を乞い、研究をかさね、演技の練習に入れば、能の演技は早く上達する。しかし、反対に「自分にはあのような欠点はない。」と慢心すれば自分自身の長所さえ全く知らない役者になってしまう。自分の長所を知らなかったら、自分自身の欠点も長所と思いこんでしまう。そのようでは、いくら時間をかけても技術は上達しない。これが下手な人が上達しない理由だ。だから、自分自身を知り、上達しても慢心すれば技術は低下し、慢心するばかり。深く深く**創意工夫**を重ねよ。「上手な人は下手な人の手本となり、下手は上手の手本とせよ」。下手な人の長所を取り入れ上手な人の長所に加えることは当然のことである。他人の欠点を見ても、それは自分の参考となる。まして、他人の長所を見ればなおのことである。「研究は熱心に、誤った思い込みをしないように」ということだ。

問答條々

問六。能に位(くらゐ)の差別(しやべち)を知る事は、如何(いかん)。

答六。これ、眼利きの眼(まなこ)には、やすく見ゆるなり。およそ、位の上がるとは、能の重々の事なれども、不思議に、十ばかりの能者(のうじや)にも、この位おのれと上される風体あり。ただし、稽古(けいこ)なからんは、おのれと位ありともいたづら事(ごと)なり。まづ、稽古の功(こう)入りて位のあらんは、常の事なり。また、生得の位とは、長(たけ)なり。嵩(かさ)と申すは別のものなり。多く、人、長と嵩とを同じやうに思ふなり。嵩と申すは、ものものしく、勢ひのある形なり。また曰(いは)く、嵩は一さいにわたる義なり。位・長は別(べち)のものなり。たとへば、生得幽玄なる所あり。これ、位なり。しかれども、さらに幽玄にはなき為手の、長のあるもあり。これは幽玄ならぬ長なり。また、**初心の人**思ふべし。稽古に位を心がけんは、返すがへすかなふまじ。位はいよいよかなはで、あまさへ、稽古しつる分も下がるべし。所詮(しよせん)、位・長とは生得の事にて、得ずしてはおほかたかなふまじ。また、稽古の功入りて、垢(あか)落ちぬれば、この位、おのれと出でくる事あり。稽古とは、音曲・舞・はたらき・物まね、かやうの品々を極むる形木(かたぎ)なり。よくよく**公案**して思ふに、幽玄の位は生得のものか。長けたる位は功入りたる所か。心中に案を廻(めぐ)らすべし。

Q & A: 現代語訳

質問六: 能の演技力の優劣はどこで見分けるのか。

回答六。それは識別力のある人にとっては難しいことではない。演技力が上がるというのは能の世界では重要なことなのに、不思議なことに、10人も役者がいれば、その演技力が自然と向上する者がいる。しかし、そんな者も練習をしなければ素養が有っても無駄になる。練習を重ねるから演技力が上がるのは当然なこと。生まれつき持っている素養とは身長であって、体格は別のものである。一般に身長と体格を同じように考えられる。嵩(かさ)というのは体格で堂々とした雰囲気のことである。また、嵩(かさ)とはすべてのことにも言えることである。演技力と身長とは別物である。たとえば、生まれ持った幽玄の雰囲気も演技力になる。幽玄さを持っていない役者には幽玄とは別の特徴を持っている。成長期にある者が心得ておかなければならないのは練習だけでは演技力が上がるわけではない。演技力が伸びないときは練習すればするほど演技力が下がることもある。結局のところ、演技力や本人の特性は生まれ持ったものであるので、それを持たない者はどうしようもない。練習の成果が出て、余分なものが無くなって演技力が出てくることもある。稽古・練習というのは音楽、舞、しぐさ、役になり切れるかの物差しである。十分に自分を省察して幽玄の素養を自分は生まれつき持っているのか、考えなければならない。持っている自分の特性を演技力・技術力として伸ばしてきたか自問しなければならない。

問答條々

問七。文字(もんじ)に当たる風情とは、なに事ぞや。

答七。これ、細かなる稽古(けいこ)なり。能にもろもろのはたらきとは、これなり。帯佩(たいはい)・身使ひと申すも、これなり。たとへば、言ひ事(ごと)の文字にまかせて心をやるべし。「見る」といふ事には物を見、「指す」「引く」などいふには手を指し引き、「聞く」「音する」などには耳を寄せ、あらゆる事に任(まか)せて身を使へば、おのづから働きになるなり。第一、身を使ふこと第二、手を使ふ事、第三、足を使ふ事なり。いかに手足利きたれども、身利かねば、品・かかり相応せず、身使ひ達者なれば、手足おのづから働く便りあり。するほどにさるほどに第一とす。次に舞・働きの**花**を見するは、手持ちなり。さるほどに第二とす。足は舞・働きの博士なれども、品・かか**り**の**花**を見する事、このうちには大用少なきが故に、第三とす。節とかかりによりて、身の振る舞いを了簡すべし。これは筆に見え難し。

その時に至りて、見るままに習ふべし。

この文字に当たる事を稽古し、極めぬれば、音曲・働き、一心なるべし。所詮、音曲・働き、一心と申す事、これまた、得たる心なり。堪能と申さんも、これ成るべし。秘事なり。音曲と働きとは二つの心なるを、一心になるほど達者に極めたらんは、無上第一の上手なるべし。これ、誠に強き能なるべし。また、強き・弱き事、多く、人紛らかすものなり。能の品の無きをば強きと心得、弱きをば幽玄なりと批判する事、をかしき事なり。何と見るも見弱りのせぬ為手(して)あるべし。これ、強きなり。何と見るも**花やか**なる為手(して)、これ、幽玄なり。されば、この文字に当たる道理をし極めたらんは、音曲・働き一心になり、強き・幽玄の境、いづれもいづれも、おのづから極めたる為手(して)なるべし。強き・幽玄・弱き・荒き事六巻に委しく見えたり。

Q&A:現代語訳

質問七。原作本を読むというのはどんなことか。

回答七。これは繊細な学習である。能の演技にはさまざまな要素があるからである。武者の装具を付けたら体全身でこなせ、というのはこのことだ。たとえば、せりふの言葉には気持ちを込めて言うことだ。「見る」と指示があれば実際に物を見て、「指す」とか「引く」という指示があれば、実際に手を使って指さし、手を使って引き寄せ、「聞く」とあれば実際に耳をたてるなど、どのようなしぐさにも体全身を使えば、自然と演技になってくる。第一は体全身に気をくばり、第二には手の使い方、第三に足の使い方に気をつけることだ。いくら手足の使い方がうまくても体全体に気をくばっていないければ、物語の進展にふさわしくないものになる。体全体をうまく使える者は手足の使い方、動きも自然とさまになる。だから、体全体の使い方に一番気を使わなければならない。

次に舞の動きの中に見せ場を作るには足の使い方が重要だ。だから、手の使い方を二番目とした。足の使い方は舞の中では多様な動きするが、物語の展開の中で、それが見せ場となるには重要ではないので三番目とした。物語の展開の変わり目に体全体の使い方に注意しなければならない。これについては原作本に書かれていないので、その場面になって、動きに変化が見えるように練習すべきである。原作本を読み込み、研究すれば伴奏の音楽、歌唱と体の動きが一体となる。結局、音楽と体の一体化というのはこれも生まれつきの特性でもある。才能というのはそのようなものだ。それは秘められたもので誰にもわからない。音楽の才能と運動の才能は別べつのものであるが、これを一つのものにしてしまうような人が最上級の名人というものだ。それができる人が能の上級者だ。そんなことのできる人、できない人もいて見る人には困惑する。演技に微妙さがなければ、強い能とし、弱弱い演技が幽玄だとする評論は間違っている。どのような演技をしようと、見ごたえのある役者であればいい。これがいい演技だ。どんな演技をしても、その中に見ごたえがあれば、幽玄といえる。原作本に即して演技をするという原則を持てば、音楽と演技を一体になり、力強い演技も微妙な幽玄の演技も自然と使い分ける役者でなければならない。強い演技、幽玄の演技、弱い演技、荒々し演技については六巻で詳しく述べる。

問答條々

問八。常の批判にも、萎(しお)れたると申す事あり。いかようなる所ぞや。

答八。これは悉(ことごと)くに記すに及ばず。その風情現はるまじ。さりながら、正しく、萎れたる風體はあるものなり。これもまた、ただ、**花**によりての風情なり。よくよく案じて見るに、稽古にも振舞にも及び難し。

花を極めたらば知るべきか。

されば、遍(あまね)く物まねごとに無しととも、一方(ひとむき)の**花**を極めたらん人は、萎れる所をも知る事あるべし。しかれば、この萎れたると申す事、**花**よりもなお上の事にも申しつべし。**花**無くては、萎れる所無益(むやく)なり。それは湿りたるになるべし。**花**の萎れたらんこそ

面白けれ、**花**咲かぬ草木の萎れたらんは、何か面白かるべき。されば、**花**を極めん事一大事になるに、その上とも申すべき事なれば、萎れたる風體、返すがえす大事なり。さるほどに、譬(たとえ)にも申し難し。

古歌に云はく、

薄霧の籬(まがき)の**花**の朝じめり秋は夕べと誰か言ひけん
また云はく、

色見えで移ろふものは世の中の人の心の**花**にぞありける
かやうなる風體にてやあるべき。心中に当てて**公案**すべし。

Q&A: 現代語訳

質問八。演技を普通に評価するとき、「しおれる」というが、これはどんなことか。
回答八。これについてすべてを説明する必要はない。心配することもない。しかし、正しく「しおれる」・生気を失うという演技はある。これも演技の見せ所となるものだ。よく考えて見れば、その演技は練習や體の使い方だけでは体得出来るものではない。**演技に見せ場**を作れるようになればわかることだ。では、どんな役回りを演じても、**見せ場**を持ってないくらいでも、何か一つで見せ場を作ろうとする人なら「しおれて」・元気をなくする演技ができることもある。その人にとってその演技は**花**と言われるような見せ場以上に価値がある。**花**がないのにしおれるというのは意味がない。そんなのはただ単に陰気なだけだ。**花**があつてこそ、しおれるのが面白いというものだ。**花**が咲いていない草や木が萎れても面白くはない。だから**花**を演じることが大事である以上にしおれることがもっと大事であるというのはこのことだ。だから「しおれる」生気を失い・気力のない演技がだいじなのだ。例えて説明しにくい。

昔の和歌にこのようなものがある。

薄霧の籬(まがき)の花の朝じめり秋は夕べと 誰か言ひけん
朝の垣根に咲く**花**は生き生きとしいが、秋の夕暮れの**花**にはかなさがあると誰かがいった。

また、別の歌に、

色見えで移ろふものは世の中の人の心の**花**にぞありける
目に見える色の世界の中で変化するものは、**人の心の中に咲く花**だ。
このように心情で、心の中で**創意工夫**をすべきである。

問答條々

問九。能に**花**を知る事、この條々に見るに、無上の第一なり。肝要なり。これ、いかにとして心得べきや。

答九。この道の奥儀(おうぎ)を極むる所なるべし。一大事とも、秘事とも、ただ、この一道なり。まづ、大方、稽古・物學の條々に委しく見えたり。**時分の花・聲の花**、かやうの條々は人の目に見えたれども、その態(わざ)より出で来る**花**なれば、咲く**花**の如くなれば、また、やがて散る時分あり。されば、久からねば、天下に名望少し。ただ、**誠の花**は、咲く道理も、散る道理も、心のままなるべし。されば、久かるべし。この理(ことわり)を知らん事、いかがすべし。もし、別紙の口伝あるべきか。ただ、煩わしくは心得まじきなり。先づ、七歳より以来(このかた)、年来稽古の條々、物まねの品々を、よくよく心中に当てて分かち覚えて、能を盡(つく)し工夫を極めて後、この**花**の失せぬ所をば知るべし。この物数を極むる心、即ち、花の種なるべし。されば、花を知らんと思わば、先づ、種を知るべし。**花は心**、種は態(わざ)なるべし。古人云わく、

心地含諸種 普雨悉皆萌 頓悟花情已 菩提果自成
心地に諸々の種を含み あまき雨に悉(ことごと)く皆きざす
頓(たちまち)に**花の情**を悟とり已(おえ)れば
菩提(ぼだい)の果(みのり)自(おのず)と成る
(慧能大師、六祖法寶壇經)

およそ、家を守り、藝を重んずるによて、亡父の申し置きし事どもを、心底に挿(さしはさ)みて、大概を録する所、世の誹(そし)りを忘れて、道の廢れん事を思ふによりて、全く、他人の才覚に及ぼさんとはあらず。ただ、子孫の庭訓(ていきん)を残すのみなり。

風姿花伝條々以上

干時応永七年、卯月十三日 從五位下左衛門大夫秦元清 書

Q&A九:現代語訳

質問九。能の**花**を知ることがこの章から見ると最重要課題のように思えるが、どうしたら体得できるのか。

回答九。それは能の世界ではすべてを習得したことを意味する。企業秘密とも言える。ただただこれだけであり、ほとんどは稽古・練習・、ものまね役になり切る事についての章で委(くわ)しく述べた。**年頃の花**は声**花**であり、その様子は誰の目にも明らかである。その魅力が年頃であることから来るものであれば、**実際の花**と同じようにいづれは散っていく花である。だから名声は長続きしない。本当の**花・魅力**というものは咲くときも散る時もだから名声は長続きしない。本当の**花・魅力**というものが身に付く理由もまた、それが散る理由もそれは心・認識・気持ち次第なのだ。**花**を長く持ち続けられるかは心の持ち方次第なのだ。

この事実を知らないではどうしようもない。そのようなことを改めて書くまでもない。面倒などと考えるてはならない。最初に7歳からこの道に入り、練習と積んで演技を体得し、演技を分析し、十分に理解して**さまざまな工夫**を尽してこそ、すぐには散らない**花・魅力**を体得するのだ。このように工夫が**花・魅力**作りの種・材料になり、技術となるのだ。

古人(慧能大師)は次のように言い残している。

心という大地にはいろいろな種・素材がある、それらは皆雨の恩恵を受けて、芽を出す。**花を見て**即時に花の気持ちを理解出来れば、その気持ちでいることの**成果**が自然とできてくる。

これは、家業を守り、能の藝能を大切にするため、亡父が言い残したことを、心に記憶していた事とをまとめたもので、社会からは非難されることも忘れて、この藝能が衰退しないことを願ったものであり、他人を指導しようなどとは思っていない。家訓として残すだけである。

うるう応永七年(1400年)、卯月(4月)十三日 従五位下左衛門大夫秦元清 書

第四 神儀云

一、申楽(さるがく)、神代の始まりといつば、天照大神(あまてるおほんがみ)、天(あま)の岩戸(いわと)に籠(こも)り給ひし時、天下常闇(とこやみ)に成りしに、八百万(やほよろづ)の神達、天(あま)の香久山(かぐやま)に集り、大神の御心をとらんとて、神楽(かぐら)を奏し、細男(せいなう)を始め給ふ。中にも、天(あま)の鈿女(うずめ)の尊(みこと)、進み出(い)で給ひて、榊(さかき)の枝に幣(しで)を付けて、声を上げ、火処(ほどころ)焼き、踏み轟(とどろ)かし、神憑(かながか)りすと、歌ひ舞ひ奏で給ふ。その御声ひそかに聞えければ、大神、岩戸を少し開き給ふ。国土また明白たり。神達の御面(おんおもて)白かりけり。その時の御遊び、申楽の始めと、云々(うんぬん)。くはしくは口伝(くでん)にあるべし。

第4章 神について:現代語訳

申楽(さるがく)というのは神代の時代にはじまったと言われる。天照大神が天の岩戸にお隠れ籠(こも)った時、世界が暗闇になり、八百万の神々が天の香久山に集まり、天照大神の気を引こうと楽器で囃し立て、滑稽な男(ヒョットコの原型)が踊りはじめ、巫女(みこ)が進み出てきて榊の枝に幣(しで)・お札をつけて、かがり火を焚き、神がのりうつたように、歌い踊りだした。その騒ぎの音に大神は気を引かれ岩戸から顔をだされ、お顔の面は白っぽくなった。この時の遊び事が申楽の始まりと伝えられている。くわしく口伝えにもある。

一、仏在所(ぶつざいしょ)には、須達(しゆだつ)長者、祇園精舎(ぎおんしやうじや)を建てて供養(くやう)の時、釈迦如来(しやくかによらい)、御説法(ごせっぽう)ありしに、提婆(だいば)、一万人の外道(げだう)を伴ひ、木の枝・篠(ささ)の葉に幣(しで)を付けて踊り叫(さけ)めば、御供養(ごくやう)延べがたかりしに、仏、舍利弗(しやりほつ)に御目を加へ給へば、仏力を受け、御後戸(みうしろど)にて、鼓(つづみ)・唱歌(しやうが)を調(ととの)へ、阿難(あなん)の才覚、舍利弗の智恵、富楼那(ふるな)の弁舌にて、六十六番の物まねをし給へば、外道、笛・鼓の音を聞きて、後戸に集まり、これを見て静まりぬ。そのひまに、如来供養を延べ給へり。それより、天竺(てんぢく)にこの道は始まるなり。

現代語訳

ブッダ(紀元前5・6・7世紀?)が須達(スジャータ)と呼ばれる長者の所におられた時のこと。長者は祇園精舎を建立し、修行をしていた頃、ブッダは説法をされていた。ブッダに反抗する提婆(デーバサッタ)はまだ修行には参加していない人たち1万人を連れだつて、木の枝や笹にお札を付けて、踊り叫んで、修行を妨害しようとした。ブッダは弟子の舍利弗(シャリホッタ)に目くばせをした。彼はブッダの教えを受けて、修行場の祇園精舎の裏で鼓を打ち、歌い出した。阿難(アーナンダ)の機転とブッダの知恵、富楼那(ドーナバストゥ)は話術で66の物語をした。するとまだ、修行に参加していなかった人たちは、音楽を聞き、様子を見に修行場の裏に集まってきて、静まった。これがインドでの演芸の始まりだ。
(このエピソードは手塚治虫の長編漫画「ブッダ」にも描かれている。T.K.)



一、日本国においては、欽明(きんめい)天皇の御宇(ぎよう)に、大和(やまと)国泊瀬(はつせ)の河に洪水の折節、河上より一つの壺(つぼ)流れ下る。三輪(みわ)の杉の鳥居のほとりにて、雲客(うんかく)この壺を取る。中にみどり子あり。かたち柔和にして玉のごとし。これ、降(ふ)り人(びと)なるがゆゑに、内裏に奏聞す。その夜、みかどの御夢にみどり子の云(い)はく、「我はこれ、大国秦(しん)の始皇(しくわう)の再誕なり。日域(じちみき)に機縁ありて今現在す」といふ。みかど奇特(きどく)に思(おぼ)し召し、殿上(てんじやう)に召さる。成人に従ひて、才智人に越え、年十五にて大臣の位に上り、秦の姓(しやう)を下さる。「秦(しん)」といふ文字、「はだ」なるがゆゑに、秦河勝(はだのかうかつ)これなり。

上宮太子(じやうぐうたいし)、天下(てんが)少し障りありし時、神代・仏在所の吉例にまかせて、六十六番の物まねをか河勝に仰(おほ)せて、同じく六十六番の面(めん)を御作(ごさく)にて、すなはち河勝に与へ給ふ。橘(たちばな)の内裏(だいり)紫宸殿(ししんでん)にてこれを勤(きん)ず。天下治まり、国静かなり。上宮太子、末代のため、神楽(かぐら)なりしを、「神」といふ文字の偏(へん)を除(の)けて、旁(つくり)を残し給ふ。これ、日曆(ひよみ)の「申(さる)」なるがゆゑに、「申楽(さるがく)」と名づく。すなはち、楽しみを申すによりてなり。または神楽を分(わ)くればなり。かの河勝、欽明(きんめい)・敏達(びだつ)・用明(ようめい)・崇峻(しゆしゆん)・推古(すいこ)・上宮太子に仕え奉り、この芸をば子孫に伝へ、化人(けにん)跡を留(と)めぬによりて、摂津(せつづ)の国難波(なには)の浦より、うつほ船に(乗りて、風にまかせて西海に出づ。播磨(はりま)の国坂越(しやくし)の浦に着く。浦人船を上げて見れば、かたち人間に変はれり。諸人に憑(つ)き崇(た)りて奇瑞(きずい)をなす。すなはち、神と崇(あ)がめて、国豊かなり。「大きに荒る」と書いて、大荒(たいくわう)大明神と名づく。今の代に靈験あらたなり。本地(ほんぢ)毘沙門天王(びしゃもんてんわう)にてまします。上宮太子、守屋(もりや)の激臣(げきしん)を平らげ給ひし時も、かの河勝が神通(じんづう)方便(ほうべん)の手にかかりて守屋は失(う)せぬ、と云々(うんぬん)。

現代語訳

日本の場合、欽明天皇の時代(509~571)、奈良の桜井の泊瀬川が氾濫した時、川上から一つの壺が流れてきた。役人がこれを拾いあげた。壺の中から赤ん坊が出てきた。姿は柔らかく珠のようだった。その子は天から降ってきたようなものだと、役人は宮殿に届け出た。その夜、天皇の夢にその赤ん坊がでてきて、こういった。「私は大国・秦の始皇帝の生まれ変わりである。縁があってこうして日本にやってきた。」と。天皇は奇異に思い、その子を宮殿で育てることにした。その子は成人すると、人並み以上の才能を発揮し、15歳で大臣になり、「秦(はた)」の姓をもらった。「秦という文字を「はた」と読むことにより、そのように名乗った。秦河勝(はだのかうかつ)というのはこの人のことだ。崇仏派の聖徳太子が排仏派の物部守屋との政争の最中、遠い昔、ブッダが行ったという故事を参考にして、66の物語を演じるように河勝に命じた。聖徳太子はそれに合わせて66の物語に必要な面も作らせ、それを河勝に与えた。河勝は橘の宮の宮殿・紫宸殿で物語を演じた。この上演があって以来、世の中は静かに治まった。聖徳太子は後世のために、神楽の神の文字の偏をとって、旁(つくり)だけにして、曆の申・さるにちなんで神楽を申楽とした。これは楽(たの)しみを申(もう)すということにもなる。

あの河勝は欽明(きんめい)天皇・敏達(びだつ)天皇・用明(ようめい)天皇・崇峻(しゆしゆん)天皇・推古(すいこ)天皇・聖徳太子に仕え、この藝能を子孫に伝えた。また、河勝は、自分の生まれ変わりの足跡残さないようにと、摂津の難波から小舟にのり、風ませで西に向かい、播磨の坂越(しやくし)の港に付いた。港の人が船のなかをのぞくと、人の姿をしていなかった。それが人々にたたって、奇行・奇跡を起こした。そして神として崇拜され、その土地・国は豊かになった。大きな事を成すので大荒明神とも呼ばれた。今もご利益があり、仏教では毘沙門天となっている。聖徳太子が逆臣の物部守屋に打ち勝った時も、河勝が神通力を使ったからだ。

一、平(たひら)の都にしては、村上天皇の御宇(ぎよう)に、昔の上宮太子の御筆の申楽延年(さるがくえんねん)の記を觀覽(えいらん)なるに、まづ、神代・仏在所の始まり、月氏(ぐわつし)・震旦(しんだん)・日域(じちみき)に伝はる狂言綺語(きやうげんきぎよ)を以(も)て、讚仏転法輪(さんぶつてんぼうりん)の因縁(いんねん)を守り、魔縁(まゑん)を退け、福祐(ふくいう)を招く。申楽(さるがく)舞を奏すれば、国穩やかに、民静かに、寿命長遠(ちやうをん)なりと、太子の御筆(ぎよしつ)あらたなるによって、村上天皇、申楽を以て天下の祈祷(きたう)たるべしとて、その頃、彼(かの)河勝この申楽の芸を伝ふる子孫、秦氏安(はだのうじやす)なり。六十六番申楽を紫宸殿(ししんでん)にて仕る。そのころ、紀(き)の権(ご)の守(かみ)と申す人、才智の人なりけり。これは、かの氏安が妹婿(いもうとむこ)なり。これをもあひ伴ひて申楽をす。その後(のち)、六十六番までは一日に勤めがたしとして、その中を選びて、稻経(いなつみ)の翁【翁面】、代徑(よなつみ)の翁(三番申楽)、父の助(ぜう)、これ三つを定む。今の代の式三番、これなり。すなはち、法(ほつ)・報(ぼう)・応(おう)の三身(さんじん)の如来をかたどり奉る所なり。式三番の口伝、別紙にあるべし。秦氏安より、光(みつ)太郎・金春(こんばる)まで、二十九代の遠孫なり。これ、大和(やまと)国円満井(ゑんまんゐ)の座なり。同じく、氏安よりあひ伝へたる聖徳太子の御作の鬼面、春日(かすが)の御神影(ごしんえい)、仏舍利(ぶつしやり)、これ三つ、この家に伝はる所なり。

現代語訳

平家の都となった京都、村上天皇の時代(在位946年～967年)、天皇は聖徳太子が書き残された「申楽延年(さるがくえんねん)の記」を読まれた。その物語は神代の時代からはじまり、ブッダのインド、中央アジア、中国を経て日本に伝わった奇想天外の物語がブッダをたたえ、その恩恵ある教えを守り、災害から人々を救い、幸福、豊かさをもたらす、と語られていた。申楽を演じ、舞をすれば、国は平和で、人々は安心して長寿を得られると語られていた。天皇は申楽で社会の安定を願おうと、申楽の藝能を伝えるあの河勝の子孫の秦氏に66番の演目を紫宸殿で演じるように命じられた。そのころ、才覚のある紀の権の守という人がいた。氏安という人で秦氏の妹の婿でもあった。秦氏は彼と共演した。この時から1日で66番の演目全部を演じることはできないので、66番の中から「稻経(いなつみ)の翁」、「代徑(よなつみ)の翁」、「父の助(ぜう)」の3番に絞った。これが今の「式三番」となった。この3番いうのは「法(ほつ)」、「報(ぼう)」、「応(おう)」といわれる如来の三身にたとえて上演することになった。「式三番」については別に口伝に記されている。秦氏安から光太郎、金春まで29代まで子孫が続いている。これが大和(奈良)の円満井座の系譜である。秦氏安から伝えられている称徳太子が作られたという鬼の面、春日大権現の絵、仏舍利(ブッダの遺骨)の三つが我が家に伝えられている。

当代において、南都興福寺(こうぶくじ)の維摩会(ゆいまゑ)に、講堂(かうだう)にて法味(ほふみ)を行ひ給ふをりふし、食堂(じきだう)にて舞延年(まひえんねん)あり。外道(げどう)を和らげ、魔縁を静む。その間に、食堂前にてかの御経(おんきやう)を講じ給ふ。すなはち祇園精舎(ぎをんしやうじや)の吉例なり。しかれば、大和(やまと)春日(かすが)興福寺神事(じんじ)行ひとは、二月二日、同じく五日、宮寺(みやてら)において、四座(よざ)の申楽(さるがく)、一年中の御神事(ごじんじ)始めなり。天下泰平の御祈祷(きたう)なり。

現代語訳

今の時代(室町時代)、奈良の興福寺で行われる維摩会(ゆいまえ)に、講堂で法話が話され、食堂では舞延年が舞われる。修行に参加しない群集をなだめ、行儀の悪さをやめさせ、その間に読経と講義が進む。あの祇園精舎の例にならっている。これは奈良の春日大社と興福寺の行事で2月2日、5日春日大社と興福寺で四つの申楽座が年の始めの神事として、天下泰平を願うものである。

- 一、大和國春日御神事に相従ふ申楽四座 外山 結崎 坂戸 圓満井
- 一、江州日吉御神事に相従ふ申楽三座 山階 下坂 比叡
- 一、伊勢 主司 二座 又今主司一座
- 一、法勝寺御修正参勤申楽三座 新座 本座 法成寺

現代語訳

奈良県の春日大社の神事に申楽を奉納するのは四つの申楽座であり外山 結崎 坂戸 圓満井 の座である。

滋賀県の日吉大社の神事に申楽を奉納するのは三つの申楽座であり山階 下坂 比叡の座である。

青芦三重県の伊勢神宮の神事に申楽を奉納するのは和屋・勝田の二座に青芦の一座である。

京都では東山の法勝寺の法要に奉納するのは新座 本座 法成寺の三座である。(平安末期から室町時代にかけて、畿内には13の申楽を演じる座集団があった。)

初期にあった66番の演目のうち現在演じられる演目とされる。

脇能物(初番目物)

- 男神物(高砂、養老など)
- 女神物(西王母、右近など)
- 老神物(放生川(ほうじょうがわ)、老松、白楽天)
- 異神物(東方朔、源太夫、難波、道明寺など)
- 荒神物(江島、和布刈(めかり)、賀茂など)

二番目物

- 勇士物(八島、籠、兼平、田村など)
- 公達物(経正、知章、敦盛、生田敦盛など)
- 老武者物(実盛、頼政)
- 女武者物(巴)

三番目物

- 本髭物(井筒、源氏供養、松風など)
- 老女物(檜垣、姨捨(金剛流・喜多流では伯母捨))
- 美男物(小塩、雲林院)
- 精天仙物(杜若、胡蝶、初雪など)
- 老精物(西行桜、遊行桜、花軍)
- 現在鬘物(祇王、籠祇王、熊野(喜多流では湯谷)、大原御幸(おはらごころ)など)
- 現在老女物(関寺小町、鸚鵡小町、卒塔婆小町)

四番目物

- 巫女・女神物(巻絹、鱗形、室君、現在七面など)
- 執心女物(梅枝、砧、水無瀬など)
- 執心男物(恋松原、恋重荷、阿漕、善知鳥、藤戸など)
- 狂女物(三井寺、隅田川など)
- 男物狂物(高野物狂、芦刈、弱法師など)
- 芸尽物(花月、自然居士など)
- 唐物(鶴亀、邯鄲(かんたん)、一角仙人、天鼓など)
- 人情物(鉢木(はちのき)、俊寛(しゅんかん)、景清など)
- 侍物(木曾、桜井、桜井駅、小督、安宅など)
- 斬合物(夜討曾我、大仏供養、忠信など)
- 尉物(蟻通、雨月、木賊、豊干、輪蔵)

四・五番目物

- 霊験物(谷行、松山鏡、藍染川、鷲など)
- 鬼女物(葵上、道成寺、黒塚など)

五番目物

- 女菩薩物(当麻、海人など)
- 貴人物(絃上、来殿、松山天狗など)
- 猛将物(草薙、碓潜、項羽、船弁慶など)
- 天狗物(善界、車僧、大会、第六天、葛城天狗など)
- 鬼物(昭君、鍾馗、野守、雷電など)
- 竜神物(愛宕空也、春日竜神)
- 畜類物(殺生石、鶴)
- 打合物(龍虎、舍利、飛雲)
- 鬼退治物(紅葉狩、羅生門、大江山、土蜘蛛など)
- 本祝言物(石橋、猩猩、大瓶猩猩)